
ホネ

さーさん

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホネ

【Nコード】

N9731X

【作者名】

さーさん

【あらすじ】

火葬場に少女がぽつんと独り。小さく囁いた。——ねえ、知ってる？ 答える者はいない。

さらさらと手のひらから零れていくそれは、ただの砂のようで。
すりつぶせば蟻を殺すほど簡単に形を崩す。

あつけない。本当にあつけない。

あれほど大きくて、恐ろしかったというのに。

——なんてもろいのか。

ぶかぶかの、着慣れたセーラー服に白が混ざる。

ちよつと身じろぎしたら簡単に払い落とせてしまふ、それ。

昔はもつと太くて、痛いほど強くしがみついていたのに。今では
ほら、そよ風に吹かれて飛ばされてしまいそう。

ねえ、知ってた？

筋張った手でまだ形の残るそれを手に取った。

「お父さん」

さらさら、さらさら。

すくった白を壺の中へと流し、落としていく。

私、先に死ぬのは私のほうだと思っていたの。お父さんの腕で首を絞められて、先に逝くのだとばかり。

ぽつんとい大きな箸が寂しげに横たわる。

ぽろぽろ、ぽろぽろ。

握めば形を成さず。

伸ばせばさくりと割れる。

あんなに強大に見えたのが嘘のよう。今ではほら、すっかり小さくなってしまつて。

青あざの浮く腕で白の納まる壺を抱いて立ち去つた。

見送る人は誰もなく。

骨壺と共にどこかへ消えた。

ねえ、知ってる？ お父さん。

私がお父さんを殺したんだってこと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9731x/>

ホネ

2011年10月27日19時01分発行